



子牛の寒さ対策

暑い夏もようやく終わり、収穫の秋となりました。農作業が忙しい時期ですが、秋じまいが終わるとあっという間に冬がやってきます。

そこで今月号では、少し早いですが子牛の寒さ対策のポイントを紹介します。

1. 子牛は寒さに弱い！

子牛の適温は、哺乳牛で13~25°C

繁殖牛と比べ、子牛は体温を維持するのが難しいため寒さ対策が重要です。

子牛が寒さに弱い理由

- 体重当たりの表面積が大きく熱を奪われやすい
 - 体脂肪が少ない
 - ルーメンが未発達で体内で発生する発酵熱が少ない
- ➡ 寒さ対策が重要！



参考

肉用牛の適温域

	適温域 (°C)
哺育牛	13~25
育成牛	4~20
繁殖牛	10~15

2. 子牛の寒さ対策

牛舎の換気や子牛の保温、増給が大事！

11月になると気温が下がり、3月頃まで哺育牛の適温域を下回る時期となります。

この時期の管理次第で、子牛の発育は大きく変わります。

① 換気は日中の暖かい時間に！

子牛を温めるために牛舎を閉め切ったままにすると、アンモニアや細菌で空気が汚れ、湿気もたまって、呼吸器病を引き起こす危険性が増します。日中の暖かい時間帯には換気を行いましょう。

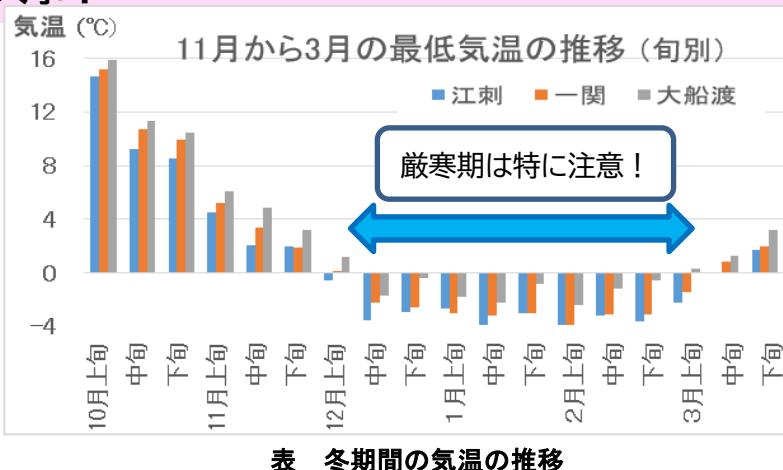
換気の注意点

★ 窓や扉を開けるときは、外気の冷たい風が子牛に直接当たらないようにします。

➡ 子牛がいる牛房にコンパネやビニールシート等で子牛が寒さから守られる場所を作ります

★ 窓や扉を開けるときは大きく開放し牛舎内の空気をゆっくり入れ替えます。

➡ 換気扇で牛舎内の湿気を追い出することで子牛の寝床も乾燥します



② 体温が奪われないように！

哺育牛は体が冷えないよう保温と寝床の乾燥が重要です。

保温の
ポイント

- ★ 子牛に防寒着を着せて暖かくします。
→ カーフジャケット、ネックウォーマーなど
- ★ 子牛の寝床は、敷料を厚く敷き、乾いた状態を保って体が冷えるのを防ぎます。
→ 敷料の厚さ10cm以上(ひざ下の辺り)
糞などで汚れたら、こまめに交換
- ★ ヒーター等で子牛を温めます。
→ カーボンヒーターの他にも、ポリタンクに60～80℃のお湯を入れた湯たんぽも効果あり
天井がある子牛用シェルターには、空間の温めに適しているコルツヒーターがおすすめ



敷料たっぷりだと床からの冷気が来ないし、乾いてるとお腹が冷えないよ！



子牛が直接触れることがあるため、バスタオルなどで覆うと安心です

カーボンヒーターは、子牛の舌が届かない120～130cm程度の高さに設置し、子牛のサイズに応じて高さを調整します。
電気コードは子牛がかじらないような場所に設置しましょう。
ヒーターのそばに乾草等、燃えやすいものを置くのも厳禁！



体温維持に必要な増給も忘れずに！

繁殖サイクルを回してガッチャリ ~見えない儲けをわしづかみ！~



↑県飼養管理
マニュアルの
ダウンロード

第5回は、『繁殖牛の管理（交配適期）』についてでした。受胎率向上に向けて、日々の発情発見を怠らず、適期に交配できるようにしましょう。

今回は、岩手県立農業大学校（以下、「岩手農大」）で実際に実施している繁殖管理の事例について紹介します。

第6回 繁殖牛の管理（優良事例紹介）

岩手農大では、テイルペイントと発情同期化法を活用して繁殖成績の向上を図っています。

テイルペイントの活用

発情予定日が近い、放し飼いの牛にテイルペイントを塗ります。朝と夕方の2回確認し、テイルペイントがはがれたら交配適期に人工授精します。人工授精後1ヶ月を経過してもはがれていなかったら妊娠鑑定を実施します。



また、交配適期に授精するため、朝はがれていたらその日の午後に、夕方はがれていたら翌日の午前中に人工授精をします。

発情同期化法の活用

繋ぎ飼いなどで乗駕行動が確認できず、粘液等の発情兆候も見られない場合に実施します。岩手農大では図1のように実施しています。

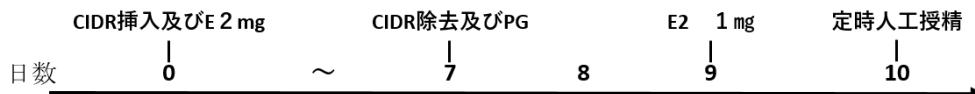


図1 岩手農大で実施している発情同期化法

例を参考に、朝夕の発情確認と交配適期の人工授精の徹底により1年1産を目指しましょう。

お問い合わせ：奥州農業改良普及センター0197-35-8451/一関農業改良普及センター0191-52-4961